

日本YMCA同盟

THE
YMCA

The Young Men's Christian Association News



No.853 2026

2026年1月1日発行（毎月1日発行）
1947年10月27日 第三種郵便物認可
本体価格45円（外税）（送料63円）
発行／公益財団法人 日本YMCA同盟
〒160-0003 東京都新宿区四谷本塩町2番11号
Tel 03-5367-6640 Fax 03-5367-6641
URL：https://www.ymcajapan.org/
発行人／田口 努 編集人／横山 由利亜



西野博之さん



吉富多美さん



田口努さん

座 談 会

子どもを「いじめ」から守るために YMCAピンクシャツデー10年

YMCAがピンクシャツデーに取り組み始めて10年になりました。いち早く始めた横浜YMCAは、「認定NPO法人 神奈川子ども未来ファンド」と協働で行政や企業を巻き込み、大規模なイベントとして展開しています。その発起人であり、現在は日本YMCA同盟の田口努総主事が、共に運営してきた西野博之さん、吉富多美さんと鼎談をし、いじめについて語り合いました。

「ピンクシャツデー in 神奈川」の始まり

田口 「ピンクシャツデー in 神奈川」には、2018年の初回から大勢の人が賛同してくれましたね。

吉富 はい。当時、福島原発事故で避難中だった子どもたちへのいじめや川崎の多摩川河川敷で中学生が殺害される事件、やまゆり園事件など痛ましい出来事が神奈川県内で続きました。何かしなければと思っていた時に、田口さんから「ピンクシャツデー」を紹介されたんです。多様性を認め合い、互いを尊重し合う。ピンクシャツデーなら子どもたちにも伝わりやすい。ぜひやろうと決まりました。

田口 企業の方もすごく共感してくれました。「社員たちも、子どものいじめに関心が高い」と、カナダまで視察に行った社長さんもいましたね。

吉富 2月の県議会や市議会がピンクに染まり、商業施設もライトアップ等の協力をしてくださいました。イベントでは声優の野村道子さんが若手を率いて朗読劇を、アコースティックデュオ「N.U.」はテーマソングを提供してくれました。

田口 いじめを心配する大人たちの思いが、一気に広がった感じでした。

西野 私は日ごろから子どもの現場にいるので、大人たちのにぎやかなイベントとは別に、子どもたちとじっくり語り合う機会として展開してきました。

田口 「子ども未来セミナー」も9年目になりましたね。毎年「いじめ、虐待、貧困」について3回シリーズで講師を招き、大変深い学びになっています。（中面へ続く）

PROFILE

西野 博之 認定NPO法人「フリースペースたまりば」理事長／神奈川大学非常勤講師／川崎市子ども夢パーク、フリースペースえん、「ブリュッケ」アドバイザー／精神保健福祉士／1986年より不登校の子どもたちの居場所作りを行う。テレビ・ラジオなど出演多数。

吉富 多美 児童文学作家／認定NPO法人「神奈川子ども未来ファンド」副理事長／虐待やいじめ、不登校をテーマにした児童書を多数執筆。代表作『ハッピーバースデー』（金の星社）は累計155万部のロングセラー。最新刊「ぼくが選ぶぼくのいる場所」ではピンクシャツデーに取り組む少年を描いている。

田口 努 1979年横浜YMCA入職。2008年～2019年、横浜YMCA総主事、2020年～日本YMCA同盟総主事。2015年、横浜YMCAの職員礼拝でカナダのピンクシャツデーを紹介したことがきっかけとなり、YMCAピンクシャツデーが始まった。



ピンクシャツデーは

世界100カ国以上で行われている、いじめ反対運動です。

2007年カナダで、ピンクのシャツを着た少年が「ホモセクシャルだ」といじめられたことに抗議し、数十人の生徒たちがピンクのシャツを着たことから始まりました。この出来事があった2月の最終水曜日は「ピンクシャツデー」とよばれるようになり、いじめについて考え、いじめられている人と連帯する思いを表す1日とされています。



「PINK SHIRT DAY in Kanagawa」には、企業や行政ほかいじめ
自殺遺族等のNPOなど多数が参加。横浜駅前大通りに開催された。
写真後列左から田口さん、吉富さん、西野さんが並ぶ。

増え続けるいじめ、不登校、自殺

田口 しかし、いじめは増え続けています。

西野 いじめの定義が変わった影響もあると思いますが、73万人と、とんでもない数です。一番いじめが多いのが小学2年生、二位が小学3年生、三位が小学1年生。いずれも低学年です。入学した途端にいじめられる。もしくは友だちがいじめられる姿を見るのです。だから不登校も減りません。

子どもの自殺も4年連続で増えました。昨年は529人。過去最多です。しかも学校問題に起因する自殺が一番多い。先日フランスの安發明子さんと対談したとき、フランスではこの20年間で子どもの自殺が半分に減ったと聞きました。が、日本は2倍に増えたんです。自傷行為も増えてます。

隙間のないストレス社会

田口 もはや各家庭の問題だけでなく、社会全体の問題です。

西野 子どもが追い詰められているなと感じます。「少子化」は「多大化」。大人が多い社会です。「ちゃんとしなさい」「人に迷惑かけちゃいけない」という大人の厳しい監視の目が広がって、社会に隙間や余白がない。「子どもってそんなもんだよ。なんとかなるよ」という子どもの世界が狭められています。

吉富 空地で遊ぶとか、寄り道するとか。子ども

たちは自由な場が減って、息苦しいと思います。大人同士のつながりも弱いから、自分の育児に焦りや不安を感じている親も多いです。祖父母も忙しい。社会に余裕がありません。

田口 僕らはここまで管理されないで育ちましたよね。野山に行って、怪我しても、失敗しても、子どもだけで自由に遊んでました。

西野 今は怪我也失敗もさせてもらえない。子どもの自由な時間が奪われてます。いじめの背景にはこういう、子どもたちの貯めたストレスがあると思います。

子どもを丸ごと肯定する

田口 「たまりば」の子どもたちは生き生きしてますね。不登校などさまざまな背景の子どもたちも皆、元気に遊んでいます。が秘訣は？

西野 大人たちの肯定的な眼差しです。「生きてるだけですごいんだ」というのが私たちの基本理念です。良いか悪いかという評価の眼差しではなく、丸ごと肯定する。そしてその子にあった環境を整えていきます。すると、子どもは間違いなく元気になっていきます。

田口 違いや多様性をすべて受け止める眼差しですね。

西野 学校は、「きちんと」「正しく」「みんな一緒に」という文化をもう少し見直していいのではと思います。「みんなも我慢してやってるんだから、

同じようにやりなさい」といった同調圧力が強い社会の中で、いじめは増えています。一人ひとりの違いを豊かに認めあえる社会にならないと、いじめは減らないと思います。

子どもの権利を認めて

田口 フランスはどうやって子どもの自殺を半分に減らしたのでしょうか？

西野 まずは権利の教育です。子どもたち一人ひとりの権利を徹底して、「ノー」と言うこと、自分の意思を伝えることを教えました。「エドゥケーター」という国家資格を持ったソーシャルワーカーを配置して、気軽に相談できる環境を作ったことも大きいんです。

吉富 子どもにとって自分の好き嫌いが言えること、そしてそれを受け止める大人がいることはとても大切です。私は横浜市の中学生人権作文の審査委員をしているのですが、小さい頃「注射イヤだ」と泣いたエピソードを書いた中学生がいました。お母さんは「だめ」と怒ったけれど、お医者さんは「いいんだよ。イヤだっていうのは君の思いだから、君はそれを言う権利がある。だけどお母さんは、病気を心配している。君を守る義務もある。その両方を考えて君が決めなさい」と言った。その言葉が、人権を考える基になったと書いていました。子どもの「いやいや期」も人権意識の表れです。頭ごなしに否定しないで、少し余裕をもって受け止める

ればよいですね。

西野 国連の「子どもの権利条約」に大きな影響を与えたポーランドのコルチャック先生は、「子どもはだんだんと人間になるのではなく、すでに人間である」と言っています。僕はこの言葉を非常に大事にしてい、教員研修などでいつも紹介しています。

子どもは生まれた瞬間から権利主体である一個の人間なんです。日本では子どもを未熟者、半人前とみなして、「大人に向かってその口のきき方は何だ」などと、意見を聞くに値しないかのように扱う傾向がありますが、赤ん坊も一個の権利主体です。尊厳ある人としてリスペクトする目線を大人が持たない限り、虐待や体罰はなくならないし、いじめもなくなれない気がします。

川崎市で、日本で最初の子ども権利条例を作るとき、「子どもに権利なんて認めたらわがままになるから要らない」という意見がありました。でも自分の権利しか認めないというのは、権利として成り立ちません。相互に認め合ってこそ権利です。権利主体としての子どもの意思ときちんと向き合う、大人の意識改革が必要です。

話す。聴く。認め合う。

吉富 以前、ある小学校の先生から、いじめで荒れた教室で『ハッピーバースデー』の本を毎日数ページずつ読み合ったら、いじめが無くなったというお便りをもらいました。虐待やいじめ、不登校という重い内容の本ですが、子どもたちは上手く言葉にできなかった自分の思いを本の中に見つけた



「学校に行かない子どもが見ている世界」西野博之著 (KADOKAWA) 2024

「ハッピーバースデー」吉富多美著 (金の星社刊)

のではない、そして言葉がどれほど人を傷つけるかを知ったのではないかとありました。違う目線で自分の行為を省みて、自分で気づくことが大事なんですね。

西野 思いを言葉で伝える力は大切です。「つらい」「悲しい」を言葉にできないと、暴力になったり、歪んで

しまったりする。同時にその言葉を「それくらい我慢しなさい」などと否定しないで、「つらかったんだね」と丸ごと受け止めることも大切です。話す力、聴く力。対話を大事にする社会。そこに鍵がある気がします。

吉富 多汗症の子が、友だちに「気持ち悪い」って言われたとき、「私はこういう病気なの」と伝えたら「そうなんだ、ごめん」とわかってくれた。何でも話せる仲になったという話もありました。最初は驚いても、話して、聴いて、認め合えるといいですね。

田口 違いを受けいれる感受性を育てたいです。相手が傷ついている、悲しんでいると気づいたときに、その声を聴き、共感できる力が大事です。いじめの少ないデンマークでは、共感力を育むための授業があると聞いています。

これからのピンクシャツデーは

田口 今後のピンクシャツデーについて一言……

吉富 いじめの話をする、よく「いじめられない子にするためにはどうしたらいいですか？」と聞かれるのですが、いじめは、いじめ側の問題です。他の人を傷つける言葉や行為は自分自身への刃ともいえます。なぜ、そうするのかを社会の大人たちが、もっと深く考える必要があると思います。

西野 特に親たちは、子どもがいじめられないように「付度できる子にしよう、目立ち過ぎない子にしよう」としますが、それではますます同調圧力が強くなってしまふ。人と違うといじめられる社会ではなくて、違いや



多様性が響きあえるような、違って当たり前なんだという社会を目指さない、いじめは減らないですね。

吉富 いじめは昔からあったし、今後もなくならないでしょう。誰にだって、いじめの根はある。知らずに人を差別し、傷つけてしまうこともあります。でもそこでちょっとストップして考え合う。そういう機会として、ピンクシャツデーはとても有効です。「いじめ撲滅」ではなく「いじめストップ」です。

年に一度、自分自身を振り返り、差別や偏見について考えを深めていく。失敗しながらも互いに学びあって、リスペクトしあえる関係をめざしていく。ピンクシャツデーの意義は大きいと思います。継続していきたいです。

西野 私たちの身近には、今も差別されている人や生きづらさを抱えている人がたくさんいます。ピンクシャツデーは、行政や企業を巻き込んだ大きな運動として広げていくと同時に、各学校や地域、企業で偏見や差別を考える、自分たちの足元を点検する運動へと深掘りしていけたらいいと思います。人間は弱い生き物ですから、すぐ傷つくし、傷つけてしまう。弱い者同士、一緒に生きていける社会をめざして、行動していきたいですね。

田口 弱くされている人に連帯して、生きづらさのある社会を変えていく運動として、今後もしも続けていかなければなりません。最近は大人の社会でも、連帯とはほど遠い、排他的で攻撃的な声が強まる傾向が見受けられますが、子どもは大人社会の鏡です。大人の人間関係のあり方は、そのまま子ども社会に反映されていきます。大人もピンクシャツデーに取り組み、一人ひとりが大切にされる幸せな文化を作っていきたいです。

YMCAピンクシャツデーの取り組み

詳細はこちら ▶ <https://www.ymcajapan.org/campaign/pinkshirtday/>



YMCAせとうち



埼玉YMCA



熊本YMCA (写真上) 大阪YMCA (写真下)



岩国YMCA保健看護専門学校



和歌山YMCA



山梨YMCA

盛岡YMCAリーダーが「こどもの人権カルタ」を制作 岩手県内の小学校全約290校に配布



「いじめです きみはあそびと おもっても」
「ふつうって何？ 男子もピンクおしゃれでいいね」
いじめや中傷を学ぶ40の標語からなる「こどもの人権カルタ」を、盛岡YMCAの学生リーダーたちが制作して11月20日、岩手県知事に紹介するとともに県内290の小学校に配布しました。

このカルタは、人権の大切さを子どもたちに伝え、学校の「いじめゼロ」を目指そうと、盛岡YMCAの学生有志による「こどもの人権プロジェクトチーム」が、岩手県弁護士会有志の皆さんと共に3年かけて制作したもの。1年目は県内の小学生から人権標語を募り、2年目は県内の高校生に絵札を描いてもらって、昨年度完成しました。

今年度は岩手県全ての小学校にカルタを配布することを目標に活動を行ってきました。岩手県若者構想実現事業費補助金、盛岡の夏祭り「さんさ踊り」や、大学の学園祭にワイズメンズの協力を得て焼きそばの屋台を出店するなどして製作費を集めました。

今後は希望する学校を対象に、かるたを使ったワークショップも計画中。チーム代表の小田原亜子さんは「制作を通じて私たち自身の人権理解も深まった。ぜひ大人にも知ってほしい」と語っています。

なお、このプロジェクトはワイズメンズクラブとYMCAによる「Y's×SDGs Youth Action」(＝下枠)による助成を得て行われ、2024年度の日本YMCA大会では「全国のプロプログラム自慢大会」でグランプリを受賞。副賞としてプロジェクトの紹介動画が制作されています。ぜひご覧ください。



動画はこちら
(YouTube 5分間)

助成金案内 社会課題に取り組むユース対象

「Y's×SDGs Youth Action2026」申請受付～2/10

YMCAとワイズメンズクラブが、2022年から実施しているユース助成プログラムが、ただいま2026年度実施グループを募集しています。持続可能な開発目標(SDGs)に取り組む若者のグループをサポートし、地域社会を変えていくことをめざしています。これまで上記の「こども人権カルタ」はじめ多数のユニークな活動を助成ていきました。ぜひ応募ください。

応募受付／2026年2月10日まで

助成内容／最大20万円の助成金のほかに、アドバイスなど各種サポートもあり。

応募条件／高校生～35歳以下の若者3人以上のグループ。所属・経験等不問。

選考方法／3月22日にオンラインで企画プレゼンテーション大会を実施

活動期間／2026年5月～12月末(8か月間)＊活動後に報告あり



詳細はこちら

全国で1万人が参加 YMCAチャリティーラン



障がいのある子どもたちを支援する「YMCAインターナショナル・チャリティーラン」が、今年も各地で開催され、これまでにランナー・ボランティアなど1万人以上が参加しました。障がいのあるランナーも年々増えており、「施設のみならず参加するのを楽しみにしている」などの感想が寄せられているほか、支援プログラムの卒業生が成人後、支援側として協力するケースもあり、地域に輪が広がっています。

全国大会委員長でパリ2024パラリンピック競泳メダリストの富田宇宙選手(EY Japan)も、横浜、大阪、奈良、広島、熊本の5大会に参加。「障がいのある人たちにとって野外活動やスポーツは、生活の質を著しく向上させるという研究もある」と、この大会の主旨を強調し、「年齢も国籍もさまざまな人が一緒に楽しく走ることで、みんなの人生の質の向上につながっていく。この素晴らしいサイクルをぜひ発展させていきたい」と語りました。来年は開催40周年を迎えます。ぜひお近くのYMCAでのご参加・ご協力をお願いします。

▼チャリティーランの詳細はこちら

<https://www.ymcajapan.org/charityrun/>

戦時下のウクライナYMCA総会に出席

10月25～26日、ウクライナ西部の都市テルノビルにて、ウクライナYMCAの年次総会が行われ、日本から2名が出席しました。テルノビルは激戦地から離れた比較的安全な都市のため総会開催地に選ばれたのですが、総会後の11月19日には、集合住宅がミサイルとドローンによる攻撃を受け、子ども3名を含む少なくとも26名が殺害され、93名が負傷しました。総会期間中、攻撃はなくても、空襲警報やサイレンが鳴り響き、その度に防空壕に避難しました。街中では一見ふつうの日常生活が繰り広げられ、学校や会社、商店など営業していても、徴兵のため男性の姿は少なく、中心部には真新しい墓石が増え続ける軍人墓地があり、学校では子どもたちは外で遊ぶことができず、休み時間にはカモフラージュネット(軍事用品)を編む。そこには、「戦争」と「日常」が交錯し、

緊張感にさらされた生活を営む人たちの姿がありました。

ウクライナYMCAは首都キーウに全国事務局と、24の都市に活動拠点があります。しかし、ロシアの占領下にあるため活動を休止せざるを得ない地域もあり、現在は17拠点で活動を展開しています。防空壕での学びを強いられた外で思いっきり遊べない子どもたちのためのリフレッシュやメンタルケア、戦後復興の担い手となるユースのリーダーシップトレーニング(北欧諸国のYMCAが協力)、ウクライナでは約370万人が国内で東部から西部に移り国内避難民として生活していますがその人たちの生活支援などが主力の活動となっています。生々しいところでは前線地域への物資等の支援、帰還した兵士の声を聴いて文学や映像にまとめる活動なども行われています。



総会では、新たにビクトリア・トロフィモワ氏が全国事務局の総主事に、アナ・チェヴェルダコワ氏が会長に選出され、さまざまな計画と共に戦後の発展に向けた希望の道筋がわかち合われました。

戦時下の総会でしたが、若い力、そして女性の活躍が目覚ましく、日本には戦後復興や平和構築に関する学びと青少年交流、継続したウクライナ避難民支援など、厚い期待が寄せられました。

日本YMCA同盟 横山 由利亜